

自然誌 だぶり 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 124号

2020年 6月

やせ細るホオジロの脛

春号であるが、秋の話題。秋になるとブナの森が恋しくなる。色づき始めた木々を眺めながらの山歩きは楽しいし、色形が様々なキノコの観察もできる。ときにはブナハリタケやマイタケのような食菌に出会えると楽しさ倍増である。そんな気持ちで、大峰山地・釈迦ヶ岳への稜線上の登山道を歩いていると、小さなワシタカのような鳥がビュンビュンと音を立てながら高速で飛び回っているのに出くわした。しばらく眺めていると、地上に降り立ち岩の上に留まり、ピーピーと姿に似つかわしくない声を出している。と、そこへホオジロのような小鳥がそばに近づいていった。「たべられるかも！」と急いでカメラをだしてファインダーを覗くと、小鳥は大きい方の鳥の口の中に自ら頭を突っ込んでいるではないか！なるほど、これが話に聞く「託卵」というものか、わが子（卵）は春早々に殺されて、十数倍はありそうなガタイのカッコウの子どもに、秋になってもせっせと餌を運ぶホオジロの親。その脛は、いっそう細くみえた。



写真 カッコウの子どもに給餌するホオジロ（2017年9月14日，十津川村旭）

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

ケリの子育て—稲作とともに—

今堀聖史

春、田植えが始まる頃から稲が育って水面が見えなくなる時期に田んぼ道を通ると、急にケリのけたたましい鳴声に驚かされることがあります。「ケケケケッ」「キリリッ ケリッ」と鳴きながら人やカラスに向かって飛んでいきます。この時期はヒナを育てているので、縄張りに近づいた敵を追い払うまで追跡します。この鳴声は近くにヒナがいることを教えてくれるので、田んぼ1枚離れた距離で静かに見ているとヒナの動きが観察できます。4月末に出会ったケリの家族を紹介します。

ケリのヒナは孵化後2日以内に巣を離れ、親に先導されて自力で採餌します(高橋2008; Bird Research News, 5/11)。孵化して3~4日と思われるヒナが、しっかりした足取りで餌を見つけ啄むのは驚異です(写真1)。ヒナが自力で採餌するキジやカルガモなどと同じようにケリも頑丈な脚や嘴になって孵化し、長期間給餌される小鳥のヒナとはずいぶん違います。

少し成長すると休耕田と隣の田で畔に沿って採餌することが多くなり、畔周辺にはたくさんの小動物が生息していることを示しています。親鳥はヒナを見守りながらカラスなど他の鳥の動きを注視し、ときおり隣の畔に移動して静かな短い鳴声でヒナを誘導します。キジやカルガモのように親鳥の後に連なっていくのではなく、個々のヒナは採餌しながら三々五々親鳥がいる方へ向かい、危険がない限り親鳥はヒナの動きを見守っているだけです。

ケリのつがい緊急発進するときがあります(写真2)。「何が来たのか?」と飛ぶ方向を見るとカラスを追い払って、親鳥の1羽は数十秒でヒナの元へ戻ってきます。4月末に5羽のヒナがいましたが、5月10日には3羽しか確認できませんでした。2羽がいなくなった理由は推測するしかありませんが、カラスに向かって空中で掴みかかるような激しい行動で追い払っている親鳥を見ると、カラスはヒナをさらっていく天敵だろうと思えます。



写真1 土塊のようなヒナ(2020.4.29 松阪市星合)

梅雨が明ける頃、遅くに苗を植えた田や休耕田にケリの若鳥が群れていることがあります。8月末に稲刈りがすんだ田に脚や体の色が淡い若鳥の群がいたり(写真3)、1羽が佇んでいた

ケリの体長は約35cmとチドリ科では最も大きく、1970年代に東北・北関東から南へ生息域を広げ、今では九州でも繁殖しているそうです。ケリは三重県全域で確認されていますが、伊勢



写真2 緊急発進するつがい(2020.5.10 松阪市星合)



写真3 若鳥の群(2009.7.18津市新家)

湾沿いの平野部に多く、生息地域の稲作の作業時期に合わせてヒナを育てるという適応をしています。稲作が今後どのように変容するのか判りませんが、これからも水田という人工の環境をうまく活用していくのだろうと思います。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町 1454-30)

松阪市四郷池湿地管理の状況(3) ～新しいRDB種と外来種～

谷口 雅仁

新しく見つかった RDB 種は、三重県レッドデータブック2015に準絶滅危惧種 (NT) として掲載されているカキランです (写真1)。

この湿地周辺では、山路武夫さんの調査により16種の RDB 種が確認されたことが「自然誌だより67号」で報告されていますので、これで17種目の RDB 種となるようです。これだけの RDB 種が一か所で見られる場所はあまりないのではないのでしょうか。カキランが咲いているのに最初に気付いたのは2018年6月で、3株ほどが花を付けていました。誰かが持ってきて植えたということもありません。恐らく今まで気付かなかっただけで昔からこの場所に生育していたのだと思います。この年は、刈ってしまわないよう気を付けて管理をしていたのですが、翌年は、なぜかやや貧弱な株を1株だけしか確認することができませんでした。カキランは地下茎を伸ばして成長するので少し心配なところですが、継続して観察していきたいと思います。



写真1 カキラン (2018年6月)

一方、新たに見つかった外来種は、東南アジアの熱帯域に生息するフェモラータオオモボトハムシです。

この昆虫は2009年に松阪市で定着しているのが確認されたもので、私も2017年から松阪市岡本町の坂内川左岸で成虫 (写真2) やクズのゴール (虫こぶ) に入った幼虫を確認していました。この湿地にもクズはかなりの本数が生えています。なるべく早めに刈り取るなどしていますので、それほど大規模には繁茂していません。ところが、2019年12月に1か所のクズの根元に不自然な膨らみがあるのが見られ、割って見ると本種の幼虫と思われるもの (2匹) が確認できました (写真3)。まさか私が体に着けて運んできたわけではないと思いますので、急速に生息域を広げつつあるなかで、この湿地にも飛んで来たのではないのでしょうか。



写真2 フェモラータオオモボトハムシ(2017年8月 松阪市岡本町で採集)

本件に関して、何か情報がありましたらご教授ください。

※ e-mail : gajin@mctv.ne.jp

TEL : 090-8556-9801

(たにぐち まさひと : 松阪市小阿坂町4038-2)



写真3 クズの根元から見つかったフェモラータオオモボトハムシと思われる幼虫(2019年12月)

里山のノスタルジア

河 北 均

里山の重要性が認識されだしたのは、2000年頃からです。国は2002年に新・生物多様性国家戦略を策定し、その中で、①種・生態系の保全及びその強化、②絶滅の防止と回復・自然再生、③持続可能な利用を3つの目標・基本方針をしています。里山の文化の重要性はさておき、種・生態系の保全と自然再生について考えてみたいと思います。

自然に関心が持たれることは良いことですし、この目標・基本方針に反対する人はあまりいないでしょう。では、具体的にどうしたいのでしょうか。国や地方自治体はいろいろな施策や事業を展開し、自然保護団体等も様々な活動をしています。

さて、ここで問題です。私たちは何をしたいのでしょうか。生態系の保全および自然再生を目指しているのだという正論に基づいているのだ！当たり前じゃないか！でも、ホントでしょうか？



写真1 谷池



写真2 皿池

最初に生態系の保全について考えてみましょう。外来種の侵入などによって「生態系が破壊される」という言葉がよく使われます。生態系そのものは破壊されません。正確には既存の生態系から新しい生態系が変わるということ短絡的に言っているだけです。日本語は意味がとおるように正しく使いましょうね。では、既存の生態系とは何なのでしょう。

ため池を例にとりましょう。ブラックバスやウシガエルなどの外来種を除去し、日本に昔からいたフナ、メダカ、トノサマガエル、水生昆虫などの在来種の世界のことを言うらしいのです。要は外来種がいる新しい生態系になると生物多様性が失われるので、それを阻止しましょうということなのです。池の水を抜いた際、外来種の駆除をしたりします。非常に良識ある素晴らしい行為ですね。パチパチパチ…。よみがえる日本の原風景！すばらしい。

ため池の自然再生らしいのですが、そもそもため池は人工的につくられたもので純然たる自然ではありません。ため池は谷池（山池）と皿池に分けられ

ます（写真1, 2）。谷池は谷の下流側に堤を作り、川をせき止めるようにして作られた池であり、山間部に多く作られています。皿池は周囲が堤で、底を掘り下げて作られた池です。三重県は谷池が大部分のようであり、江戸時代もしくはそれ以前につくられたものが多いようです。ため池の成立から現在に至るまでの生物相の変遷は、地域によって異なりますが、段階的には概ね次のとおりです。

第1段階……堤で川をせき止めてため池が作られ、周囲からトンボ、水生甲虫、水生半翅類など止水域の昆虫など外来種が侵入します。

第2段階……ため池によって異なりますが、コイ、フナ、ウナギなどの主として止水域に棲む在来種が移入され、それに伴いタモロコなど子魚もいっしょに放流されたりします。ジュンサイ、ヒシ、スイレン、ハス、カキツバタ、ハナショウブなど止水域の水生植物が鑑賞用、食料として移植され

ます。

第3段階……明治以降近代に入ると外来種が侵入します。アメリカザリガニ、ウシガエル、カムルチーなどが戦前に日本に侵入します。全国的に広がった時期や三重県に侵入した時期について不勉強なので知りませんが、1950年代後半～1960年代前半には、伊勢市付近において、これらの外来種は既に広がっており、普通に見られました。

第4段階……グローバル化されつつある時代に入ると、外来種の第2波がやってきます。ブラックバス、ブルーギル、アカミミガメ、オオカナダモ、ホテイアオイなどが広がります。第2波の影響は大きく、多くの在来種は壊滅します。里山保全運動が起こり、国が生物多様性国家戦略を策定するなど社会問題にもなります。

このように、ため池の動植物相は時代によって変化します。国は生態系の保全および自然再生を目指していますが、具体的にはいったい何がしたいのでしょうか。どの段階の再生をしたいのでしょうか。一律に外来種の駆除を勧めているので、おそらく第2段階を目指しているものと想定されます。「昔よりザリガニは少なくなったな。ライギョもいなくなった」など、里山の原風景を懐かしんでいるのは、子ども時代にアメリカザリガニを採って遊んだ経験がある50～80歳代の人たちです。里山の生態系の保全および自然再生を目標にして活動しているのはこの年代です。第3段階を青少年時代に過ごした人たちが第2段階に理想を求め、第4段階にたくないという想いではないでしょうか。第1・2段階の人たちは大部分の方がこの世を去っていますし、若い世代にとって、ため池の自然とは、バス釣りをしている第4段階です。世代によって里山の原風景は異なり、今、声高く叫ばれている里山保全とは中高年世代のノスタルジアに過ぎないのではないのでしょうか。

時代によってため池の生態系は異なりますので、いっそのことゾーニングしてはどうでしょう。江戸村ため池、明治村ため池、昭和村ため池、平成・令和村ため池と区分し、それぞれの生態系を保全するのです。江戸村ため池は在来種のみ、昭和村ため池は在来種に加えアメリカザリガニ、ウシガエルまでの外来種、平成・令和村ため池は在来種絶滅、ブラックバス、ブルーギル、アカミミガメ、オオカナダモなどというふうに特色をだすのです。土地所有者のこともあり実現へのハードルは高そうですが、集客効果が期待できてため池の利活用にもなり、上述の3つの目標・基本方針の達成にもつながります。この案について、国も前向きに検討してもらいたいものです。

(かわきた ひとし：伊勢市岡本1丁目17-18)

会員の本

「おいらは蟲」 浅名正昌 写真集

B4変形版、124頁、2020年3月 自刊 売価2800円（送料込み）

2012年の「伊賀盆地のトンボーその見分けかたー」について浅名さん2冊目の写真集。お得意のトンボはもちろん、ゾウムシやチョウ、セミ、バッタまで、その被写体は幅広く、種の特徴を的確に捉えた写真が多い。正面からのアップも多くあり、眺めていると虫の目が何かを語りかけてくる錯覚に陥る。種まで判明した写真が多いので、撮影日時が判れば地域の自然誌資料としても貴重であるとお伝えしたところ、つくりますとのことであったので、会員の皆さんにはデータ付きで送られてくるかもしれない。上野森林公園（伊賀市）を拠点に撮影されており、獣害対策で里山に張り巡らされたフェンスがかなわんと、鹿の気持ちを代弁するようなことを言ってみえた。御年87歳、写真集の発刊は「まだ途中」とあとがきにあるので、次作の構想はすでにお持ちのことであろう。購入希望は、葉書に住所・氏名・電話番号を明記して、浅名さん（〒518-0837 伊賀市緑ヶ丘西町2424-11）までお申し込み下さい。



侍谷林道の返り咲きサクラは「コヒガン」だった

山本和彦

本誌118号(2018)に掲載された清水善吉さんの「桜咲いたか」の中で、松阪市伊勢寺町侍谷林道沿いの早咲きのサクラがソメイヨシノとして紹介されています。このサクラが「自然誌だより」に掲載される前に、清水さんから花の咲いた画像添付のメールが送られていましたが、私もソメイヨシノの返り咲き(狂い咲き)かなと思いつつ、画像だけでは判断することができずそのままにいました。でも少し気になっていましたので、清水さんに押し葉標本をお願いしました。いただいた標本は、11月でしたので葉の付いていない一枝花だけの標本でしたが、小振りでソメイヨシノとは違っていました。ただ、私には何というサクラであるかまでは分かりませんでした。その時、清水さんには一度サクラの専門家である勝木俊雄さんに標本を送って同定してもらいますと話した記憶があります。翌



年(2019年)の5月、勝木さんがクマノザクラの調査で尾鷲に来られたときに、清水さん作成の押し葉標本をみてもらいました。同定の結果は、花だけでは何とも言えないので、葉も見せてくださいとのことでした。

再度清水さんをお願いし、葉の付いた標本を作ってもらったのですが、例のとおり行動が遅い私のこと、今年(2020年)の3月になってようやく重い腰を上げ、これまで貯めていた自分のサクラ類の標本とともに送ることになりました。勝木さんからの同定結果は、「標本を見る限り、マメザクラとエドヒガンの雑種(コヒガン)のように見えます。人が住んでいる地区にも近いようなので、植えたものの由来でしょうか?」とのコメントでした。



サクラの図鑑(勝木2001;日本の桜,学研)には、コヒガンはマメザクラやエドヒガンが自生する伊豆半島などでも見られるが、江戸期から「彼岸桜」として広く栽培されていること、「小彼岸」や「十月桜」、「四季桜」など、この雑種に分類される栽培品種は数多くみられることが記載されています。小彼岸の花の時期は早春ですが、十月桜、四季桜は毎年返り先咲きをする品種で、秋から春にかけて咲きます。



十月桜はコヒガンの中で八重咲きのものを指し、四季桜は一重となっています。清水さんが紹介している侍谷林道の返り咲きサクラは一重で、2018年の11月には満開でした。翌2019年の11月に私が見に行ったときもよく咲いていました。この返り咲きの性質が毎年固定されているようでしたら、侍谷林道のコヒガンは四季桜と呼ばれる栽培品種かもしれません。果たして今年の秋も満開に咲くでしょうか?

写真 上から2019年12月13日、2020年1月19日、3月23日撮影。紅葉の頃に満開となり、春、ハクモクレン(左側)が咲く頃には葉桜となる。

(やまもと かずひこ:尾鷲市小川西町8-40)

伊勢湾にもいた！ナミノコガイとキュウシュウナミノコガイ

中野 優子・中野 環

私たちは、2017年から津市や伊勢市の海岸でフジノハナガイの観察を続けています。2019年8月から2020年4月に行った観察中に、これまで伊勢湾の海岸から記録の少ないナミノコガイとキュウシュウナミノコガイの生息を確認したので報告します。

ナミノコガイ *Latona cuneate* は殻長25mmほどの二枚貝で(写真1)、三重県では、志摩市阿児町国府や浜島町南張、南伊勢町田曾浦、尾鷲市三木里町、熊野市新鹿町・大泊などの波あたりが大きく、傾斜のある砂質の砂浜が広がる熊野灘沿岸で観察できます(図1)。標本調査は行っていないですが、伊勢湾沿岸については、三重県総合博物館が所蔵する伊勢市産の個体(登録番号329：詳細地名および採集日不明)が唯一の記録です。2019年8月9日、津市阿漕浦での観察中に、多数のフジノハナガイに混じり少し形が違う貝を1個体みつけました。一瞬目を疑いましたがナミノコガイ、しかも生きているではありませんか！2個体目がないか、周囲を丁寧に探しましたが発見には至りませんでした。その後、2020年3月14日にも1個体を確認することができました。これらの個体は、伊勢湾内に運ばれた幼生が、運良く定着して成長したも

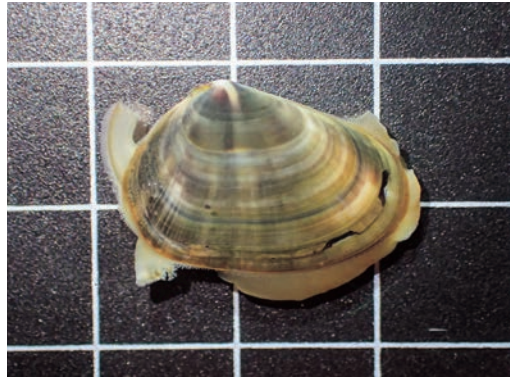


写真1 ナミノコガイ (2020年3月14日)

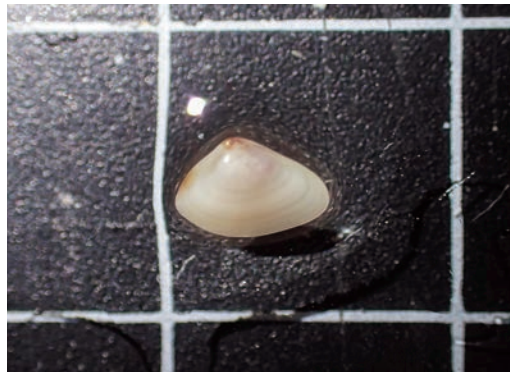


写真2 キュウシュウナミノコガイ(2020年3月14日)



図1 三重県におけるナミノコガイの確認地点。



図2 三重県におけるキュウシュウナミノコガイの確認地点。

のと考えられますが、熊野灘沿岸における生息環境とはずいぶん異なる伊勢湾内で生息していたことに驚きました。確認したナミノコガイの大きさは次のとおりです。

2019年8月9日確認個体 殻長：12.38mm，殻高：9.25mm

2020年3月14日確認個体 殻長：18.20mm，殻高：13.90mm

キュウシュウナミノコガイ *Latona kiusiuensis* は(写真2)、殻長10mmほどの二枚貝で、三重県では、志摩市阿児町国府や浜島町南張、尾鷲市三木里町、熊野市新鹿町、大泊などの熊野灘沿岸で確認されています(図2)。ナミノコガイに比べて貝殻が小さく、波打ち際よりも水深がある場所に生息するので、海岸に打上げられた貝殻を見ることはありますが、生きた個体はあまり見たことがありませんでした。伊勢湾沿岸については、伊勢市二見町の海岸で貝殻を拾ったことがあります。今回の観察では、津市阿漕浦で、2019年8月26日、12月8日、2020年1月26日、2月11日、3月14日、4月11日に数個体ずつ観察しました。いずれも、最も潮が引いた海岸の波打ち際から水深75cmまでの範囲で確認しました。

(なかの ゆうこ・なかの たまき：度会町大野木1711-1)

● 訂正とお詫び ●

自然誌だより123号3頁の本文下から6行目「(例えば、和歌山県の旧カスミは2種になった)」の部分削除します。和歌山県内の旧カスミサンショウウオはすべてセトウチサンショウウオとして記載されていました。お詫びして訂正します。なお、中国地方の各県では2種以上に細分されたところが多いようです(上田利彦)。

事務局から

○三県合同フィールドワークの延期

6月13-14日(土・日)の日程で鳥羽市答志島・菅島で予定していましたが、新型ウィルス拡大防止のため10月10-11日(土日)に延期しました。詳細は同封のチラシをご覧ください。

編集後記

「里山のノスタルジア」の著者・河北さんから、「“戦国時代村ため池”もつくればよかったかな。カミツキガメ、アリゲーターガー、ピラニア、池の周囲にはツマアカスズメバチ、ヒアリをばらまき、狂暴生物の乱世を創出すれば…」と、後日メールをもらいました。また、「異なる意見の方が何か書いてくれれば嬉しい。ため池は、半自然だから原生自然に戻すため壊せとか、生態系は変化するものだから放置しておくべきだとか、いろいろな意見があって良いでしょう」とのことです。会員の皆様も思うところを書いてください。また、表紙については、このところ私が埋めていますが、いよいよネタ切れ(春号なのに秋の記事)です。夏号は9月発行予定です。たくさんのご投稿をお待ちしています(善)。

自然誌だより124号 Mie Natural History Research Group News No.124

発行日 2020年6月24日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp